

# 第42回

全国中学生人権作文コンテスト

# 三重県大会入賞作文集



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君



人権イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん

津地方法務局・三重県人権擁護委員連合会

## 世界人権宣言

第1条 すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

世界人権宣言は、1948年（昭和23年）12月10日、第3回国連総会において採択されたものであり、人権及び基本的自由を遵守し確保するために、すべての人民とすべての国が達成すべき共通の目標ないし基準を定めたものです。

第四十二回

全国中学生人権作文コンテスト  
三重県大会入賞作文集

津地方法務局  
三重県人権擁護委員連合会

## は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会は、次代を担う中学生の皆さんが、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づく作文を書くことを通して、人権尊重の大切さや基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的として、昭和五六年度から毎年「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しております。

これを受け、津地方法務局と三重県人権擁護委員連合会では、三重県教育委員会、中日新聞社、NHK津放送局、三重テレビ放送、伊勢新聞社の御後援を得て、四十二回目となる「全国中学生人権作文コンテスト三重県大会」を実施したところ、県内の一四二校から三万四五〇四編に上る作品が寄せられました。

応募された作品の内容は、「いじめを含む子どもに関する問題」を始めとして、「障がいのある人に関する問題」、「外国人の人権問題」、「戦争と平和」、「性的マイノリティ」など多岐にわたっており、日々の学校生活や家庭の中などで起こっている身近な出来事を注意深く捉えたものや、人権問題を解決し、お互いがより快適に生活するにはどうしたらよいかを深く考えたものなど、いずれの作品も中学生らしい感性に富み、純粋な感覚で人権問題を捉えたものばかりでした。

また、自分は今何ができるのかについて悩み、真剣に考え、そして知識や経験だけに頼らず、自分なりの答えを導き出していくその過程は、とても力強く、深い感動を受けました。

この作文集は、「三重県大会」において最優秀賞及び優秀賞を受賞した作文を収録し紹介するものです。一人でも多くの方々に御愛読いただき、基本的人権を尊重する輪が更に大きく広がるよう願っております。

終わりに、この人権作文コンテストの実施に当たり、貴重な時間を費やし熱心に作品を書かれた中学生の皆さんを始め、御指導いただいた先生方、保護者の皆様、御協力を賜りました中学校、各市町教育委員会、また、御支援をいただきました関係各方面の方々に心から感謝申し上げます。

令和六年二月

津 地 方 法 務 局 長 澤 田 竜 彦  
三重県人権擁護委員連合会長 上 野 尚 子

# 目次

掲載頁

## 最優秀賞（三編）

（津地方法務局長賞）

今やるべきこと …………… 四日市市立笹川中学校二年 古市啓人 …… 1

（三重県人権擁護委員連合会長賞）

誰もが住みやすい社会へ …………… 桑名市立陵成中学校二年 若命杏奈 …… 5

（三重県教育委員会教育長賞）

向き合う勇氣 …………… 明和町立明和中学校三年 宇田妃莉 …… 9

## 優秀賞（八編）

（中日新聞社賞）

自分のことを好きになること …………… 津市立東橋内中学校一年 デロス フランシス …… 13

個性じゃなく魅力 …………… 明和町立明和中学校二年 石田翔埜 …… 17

(NHK津放送局長賞)

身近になった障害	……………	鈴鹿市立鈴峰中学校二年	伊藤心優	21
祖母の手となり足となり	……………	伊勢市立城田中学校一年	中崎恭誠	25
(三重テレビ放送賞)				

受け継ぐ世代として	……………	伊賀市立崇広中学校三年	藤崎香帆	29
新しい視点と変わる自分	……………	玉城町立玉城中学校三年	西川論	33
(伊勢新聞社賞)				

ぼくの指	……………	鈴鹿市立創徳中学校一年	辻尊樹	37
いつも傍にいてくれてありがとう	……………	津市立東橋内中学校一年	ボロミユカ	41

奨励賞 (八編の作品一覽) …………… 45

写真集 …………… 46

\*原文に忠実を原則にしましたが、誤字・脱字等については最小限の訂正をさせていただいたものもありますのでご了承ください。

○三重県大会 最優秀賞（津地方法務局長賞）

今やるべきこと

四日市市立笹川中学校 二年

古市啓人

僕は「きょうだい児」というカテゴリーに分類されるらしいです。

きょうだい児という言葉を知ったのはごく最近のことです。何となく目に入った言葉でしたがずっと頭の中で引っ掛かっていたので調べてみることにしました。きょうだい児とは、病気や障がいのある兄弟姉妹を持つ子供のことです。「きょうだい」と平仮名で表記されるのには、兄、弟、姉、妹と様々な組み合わせがあるという理由からだそうです。そして僕の兄は自閉症スペクトラムと診断されています。この時点で、きょうだい児とは自分のことだったのだと理解しました。ただこれを知って「そうだったのか」と感じたくらいでした。きょうだい児が知られるようになったのは近年だそうです。同じ様な意味合いで家族の看病や介護、家事を行う「ヤングケアラー」の方がもっと広く知られているかもしれません。今までは障がいのある本人へ

の支援が主であり、それを支える家族には支援の手は行き届いていませんでした。最近では「ケアをする人にもケアが必要」という考え方が広がってきました。それによりきょうだい児にも焦点が当たるようになりました。でも、自分が兄をケアしているとは考えたこともありませんでした。当たり前のように両親がいて家族と生活をしている中で、なぜ自分にもケアが必要となるのか疑問に感じました。今まで自分が感じてきた当たり前のことが皆とは何か違うのかと不安になりました。僕にはきょうだい児として話せる友達はいません。そのような話を友達に話したこともないし、話そうと思っただけでもありません。もしそのような話題になったとしたら、別の話題に話を変えるのだらうと思います。何故なら、兄に対する自分の気持ちは誰かに共感してもらおうとは思っていないからです。そしてそれ以上に友達の前ではみんなと同じただの自分でありたいと思うからです。

僕は自分と同じ境遇の人は、どう感じているのか知りたくありません。調べてみると、まるで自分の心の中を覗かれているような気分になりました。例えば、きょうだい児が抱える悩みの変化についてです。幼い頃は気付かずに育っていることが多い。しかし、言葉にできなくても周りとの違いを感じたり、寂しい思いや不満を我慢して聞き分けの良い子を演じてしまう。小学校以上では兄弟姉妹のことを「恥ずかしい」「隠したい」という思いが出てきて、そう思う自分を責めたり罪悪感を感じたりする。中学生以上になると障がいや家族のことについて調べ、自

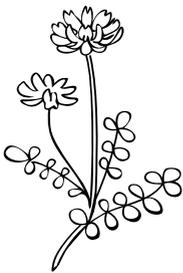
分なりの意見や考えを少しづつ持ち始める。親の大変さを知ることと責任感が強まる一方、将来への不安も抱くようになるが、不安や孤独感を誰にも相談できずに一人で抱え込んでしまう、とありました。僕が幼少期から辿ってきた感情がそのままここにあったのです。僕が幼稚園の頃兄の長期入院に伴い祖父母の家に預けられた時、寂しくて不安で毎日帰りたくて仕方なかったこと。楽しそうな玩具や遊具が並んだ療育室から聞こえる兄の笑い声と暗い廊下で絵本を読みながら静かに待たされる僕の姿。外で不意に声を出したりパニックになる兄が恥ずかしくて、何かと理由をつけて家族での外出を避けていること。兄がいる家に友達を呼びたくないこと。普通の兄だったらどれほどよかったかと思っただけのこと。心の中に閉じ込めてあった感情や景色が一気にあふれてきました。誰にも話さずにいたのは両親や兄が悲しむからというよりも、こんな考え方をしてしまう自分が許せなかったからなのかもしれない。正直、閉じ込めていた感情を振り返り、向き合うことは苦しかったです。でも、きょうだい児として共感できる世界を見つけることができ、心が軽くなった気がします。

この先きようだい児が抱える問題として、就職や結婚、親亡き後の兄弟姉妹のケアはどうしていくのか等があるようです。僕自身、まだ現実味は全くありませんが、想像すると自分が思い描いてきた未来とは全く違う未来が見えてしまいました。この不安を解消するべく、両親が考える将来像を聞いてみることにしました。兄は来春高等部を卒業し、B型福祉作業所に通う

予定だそうです。そこで得られる収入や、二十歳からの障害年金の制度、自立をするためにグループホームがあること、他にも様々な制度や福祉サービスについて教えてくれました。両親からは、

「兄を守る制度やサービスはいろいろあるからこそ、心配せずに自分が一番やりたいことに向かって前向きに進んで欲しい。」  
と言われました。

この先どのような未来が待っているのかは誰にも分かりません。僕がどのような選択をしたとしても、兄のせいだとは絶対に思いたくありません。今自分ができることは、ただ自分のために未来に希望を抱いて頑張ることだと思いました。



○三重県大会 最優秀賞（三重県人権擁護委員連合会長賞）

## 誰もが住みやすい社会へ

桑名市立陵成中学校 二年

若 命 杏 奈

大阪に住んでいる私の祖母は昔、盲学校の教師をしていました。その当時の生徒さんが府内に住んでいるため、毎月一回の通院の際に、病院まで付き添いをしています。私たちはその方のことをよねちゃんと呼んでいます。今年の春に、私も一度付き添いを手伝わせてもらいました。

当日は、乗り換え駅のホームで集合して、電車に乗って病院まで一緒に行きました。祖母が私を紹介すると、よねちゃんは「よろしくね。今日はありがとうだね。」と笑いかけてくれました。会うのは初めてで緊張していたので、気さくに接してもらって嬉しかったです。

電車に乗っておしゃべりをして、いろいろなことを知りました。よねちゃんは笑顔がかわいいですてきな人で、最近染め物を習いに行っているそうです。生まれつき目が見えないので色

が分からないけど、「ふわふわしたかんじ」「すずしいイメージ」など、想像しながら染めていくそうです。旦那さんも全盲の方で、ご夫婦は仲がよく、この日も一緒に病院に来ていました。二人とも目が見えないのにどうやって駅まで来ているのだろうと疑問に思っていたら、祖母が「家から近い駅のように、何回か行ったことのある場所なら一人でも行けるんだよ。」と教えてくれました。他にも職場や近所のスーパー、公園など一人で行ける所は多いそうです。

タクシーで病院に着くと、そこからは祖母がよねちゃんの、私が旦那さんの誘導をすることになりました。腕を組み、移動する方向を伝えながら歩いたり、椅子に座る時には椅子の場所を伝えたりしました。診察券を機械で発行するなどのことは自分でなさっていました。私は最初、機械を使ったりお金を払ったりということは付き添いの人が全部代わりにするのだと思っていましたが、多くのことはご自分でできるのだと知って正直驚いてしまいました。よねちゃんも旦那さんも、私のお母さんやお父さんと同じ大人なのに、目が不自由だということだけでできることが少ないと勘違いしていた自分が恥ずかしいなと思いました。こういう勘違いをしている人は私以外にもいるようで、病院のお医者さんは説明をよねちゃん本人ではなく、付き添いの私の祖母に向かってするそうです。その度に祖母は「私は付き添いなので、説明は本人にしてください。」と伝えていると後で聞きました。

診察が終わり、タクシーに乗って駅に戻りました。帰り道でもいろいろな話を聞かせてもら

いました。銀行のATMなどには、通帳やカードの挿入口や操作ボタンに点字が設けられていること、最近紙にかいた文章を音声にして読み上げてくれるアプリがあること、キーボードについている点が目印となり、タイピングもできること、お金も指で触って識別できるようになっていることを教えてもらいました。そのような仕組みがあるので、自分でできることが多いそうです。

その逆に、不便なことや困ったことも教えてもらいました。ユニバーサルデザインとして取り入れられるタッチパネルは使うことができないものが多いそうです。マイナンバーカードの暗証番号設定の時はタッチパネルでの入力だったため、自分で入力できなかったそうです。暗証番号は大切な個人情報なのに、それを、他者に入力してもらわないといけないなんて変だと感じました。そもそもユニバーサルデザインとは、誰もが利用しやすく、暮らしやすい社会になるようにとの考え方のはずなのに、視覚障害を持つ人が使えないというのはおかしいと思います。視覚障害を持つ人ができることをわざわざ減らして他の人にやってもらわないといけません。視覚障害を持つのはその人たちの権利を大切にしているといえるのか疑問に思いました。

別れ際に、よねちゃんと旦那さんから点字のカレンダーをもらいました。一番最後のページには点字一覧がついていたので私も触ってみました。目を瞑りながら触ると点が何個あるのかすらも分からなかったです。祖母と「点字を毎日のように使っているよねちゃんたちはす

「ごいね。」と話しながら家へ帰りました。

今回、付き添いを手伝って、私が気付いていないだけで身の周りにいろいろな工夫がされていることや、逆に使いにくくなっているものがあること、障がいを持つ人は助けが必要なこともあるけれど、自分でできることも多くあって、自分でできることは極力自分でやりたいと思っていることなど、普段の自分の視点からは知ることができなかつたことをたくさん学びました。私は人の役に立てる人間になりたいです。そして、誰もが住みやすい社会を実現できる仕組みを考える一員になりたいと思います。



○三重県大会 最優秀賞（三重県教育委員会教育長賞）

## 向き合う勇氣

明和町立明和中学校 三年

宇田 妃莉

私は今まで「いじめ」と無縁の生活を送ってきました。しかし、人生で初めて経験をしました。とても辛く苦しい時間でした。

それは突然前ぶれも無く訪れました。仲が良かった友達と話をしない、目も合わない、それだけで教室に一人ぼっちでいる気分になりました。休み時間は周りの楽しそうな声が聞こえてくるたびに苦痛で辛い時間でした。話し声全てが私の悪口を言われているように思えてきました。一人、二人と全く関係の無い人まで当たりが強くなりました。教室にいる時間、休み時間に廊下に出る時、学校で過ごす大半の時間が苦痛の時間になり私の心は壊れる寸前でした。人は心が壊れかけると頭の中にポカンと穴が空いたかのように何も考えられなくなり、お腹も空かなくなってしまう。何も考えられないから正しい判断が出来ず、食べられないから体力

も無くなって気力も失っていきます。とにかく早く家に帰りたいたいという思いで教室の時計を見つめる日々でした。しかし、唯一心が休まるはずの家での時間までもが学校で過ごす時間同様に辛く苦しい時間になっていきました。

私は携帯電話を持っています。学校が終わった後も休みの日も友達と連絡が取れるので便利な物ですが、この時の私にとっては心休まる時間を奪う物になりました。便利な物でも人を傷付ける凶器になるのです。顔を見て声に出して直接言えない言葉も、携帯電話の文字を通してボタン一つで言えてしまうのです。いつでも連絡が取れる、二十四時間繋がっている環境というのは時と場合によっては劣悪な環境になります。SNSによる誹謗中傷によって自ら命を絶つという悲しいニュースを何度か耳にした事がありますが、私は他人事ではないと思えました。ボタン一つで、文字という凶器で人の命は奪われてしまいます。そして、その状況を一人で抱えてしまったら、一人で耐える時間が長かったら、私も同じような答えを出していたかも知れません。誰かに助けてもらう。それが私の出した答えでした。

私の状況に気付いてくれたのは母でした。「学校楽しい？」母の突然の問いかけに私は自然と涙がこぼれました。一人で抱えていた全ての事を話す事が出来ました。寄り添ってくれる人がいる、味方になってくれる人がいる。一人じゃないとわかった私はこの問題に向き合い始めました。逃げるのでは無く、向き合おうと覚悟を決めました。

私は友達に対して、嫌だなと感じる事があっても腹立たしい事があっても、その気持ちを仲が良ければ良い友達程、伝える事が出来ません。悪い空気になるのが嫌で自分の気持ちに嘘をつき相手に合わせてしまいます。この問題に向き合った時、人に合わせてばかりでは自分を大切にしていけないのと同じ事だと気づきました。それと同時に本当の感情をぶつけていたら良かったとも気づきました。ありのままの自分で向き合ってみました。自分の気持ちを正直にぶつけてみました。怖かったしこの先どうなるのか不安もありましたが、私は一人では無いんだと強い気持ちが不安を消し去ってくれました。自分の気持ちを大切にした結果、私は毎日笑っています。楽しい学校生活が戻ってきました。一人で解決出来たわけでは無く、そこには寄り添ってくれた家族、友達、先生がいました。人は皆、自由だと思えます。自由に考え、自由に行動し、幸せに暮らせる権利を持っています。それが「人権」です。決してわがままに生きていいという事ではありません。自由のままに好き勝手に考え発言していいという事ではありません。それを教えてくれたのは寄り添ってくれた人達でした。自分をまずは大切にしよう。自分を一番好きになってあげるのは自分であるべきだと気づきました。それが出来ない時、自分を見失いそうな時は誰かに頼る事でまた前を向く事が出来ます。人は一人では生きていけません。必ず誰かに助けられています。だからこそ、助けを求めていいと思います。助けを求めるのも自由、頼るのも自由。その先に幸せな時間があるのなら、それが自分を大切にする一番の

近道です。

私はこの経験を通し、人に寄り添える人になりたいと思います。悲しい思い辛い時間を過ごしている人がいたら、助けを求められたら、その人が自分自身を大切に思えるまで寄り添ってあげたいと思います。言葉の凶器、一人になる恐怖、誰がいつ経験してもおかしくない世の中に私たちは生きています。自分らしく自由に幸せに暮らすためにはまず自分を大切にしてください。誰かに頼って下さい。必ず誰にでも寄り添ってくれる人がいます。誰かを大切に思っているの心を持つためにまずは自分自身を大切にしていきたいと私は思います。



## 自分のことを好きになること

津市立東橋内中学校 一年

デロス フランシス

今年公開されたディズニー映画「リトルマーメイド」の主人公の人魚アリエルを黒人が演じました。インターネットでは様々なことが言われています。「黒人のアリエルなんてありえない。」黒人が主人公を演じただけですごい反応でした。昔の私なら同じことを思っていたかもしれません。「だいたい映画の主人公は白人」「肌が白い人だけが認められる社会」だと思っています。だからです。

私は、生まれつき肌が黒いです。フィリピンにルーツがありますが、小さい頃からずっと日本で暮らしています。私はその肌のことで差別を受けたことがあります。

小学校二年生の時のことです。休み時間に友達から「なんでそんなに肌黒いん」とからかわれました。とても嫌な気持ちになりました。「肌が黒いことは、誰かにバカにされたりするこ

となのか。」私が初めて自分の肌について悩んだ瞬間でした。それ以来、肌が黒いことを気にするようになりました。友達のところに行くとき、肌のことを指摘されるようになりました。とても嫌だったけど、友達を失いたくないので、何を言われても無視して我慢していました。

毎日のように、友達は肌が白くていいなって思っていました。日焼け止めを塗ったら少しは白くなれるかなと思いついて、毎日お母さんののを借りて、何度も塗りました。また、私がお気に入りの上着で登校した時に「外国人やから服洗ってないんやで」と言われました。学校の中で、肌が黒くて外国にルーツがある私だけがからかわれているように感じました。

先生たちに相談もしました。先生たちは私のことを本気で考えてくれて怒ってくれました。私をからかった友達も謝ってくれ、少しずつですがこれから変わっていくのかなと思いました。小学校四年生のとき、突然転校することになり、せっかく学校の中で私への差別がなくなってきたのに、また新しい学校に行くのかと思うととても不安でした。また差別されるかもしれないと毎日考えていました。

転校した初日のことです。また前の学校みたいに、肌が黒いことや外国にルーツがあることを理由にいじめられたりするんじゃないかとビクビクしていました。しかし、予想とは違い、その教室には外見が日本人とは違う人がたくさんいて、中には肌の黒い人もいました。教室に入ると、同じクラスの子が転校してきたばかりの私に、席を教えてくださいました。そして、「サツ

カーしよ」「遊びに行こ」と言ってくれました。見た目関係なく仲良くしてくれる友達がたくさんできました。

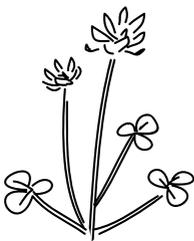
今の学校は、外国にルーツを持つ人が約六〇%もいます。肌の白い友達や黒い友達もいます。日本語の勉強を頑張ったりしている仲間もたくさんいます。みんな差別をしません。むしろ学校でも学校の外でも助け合って生きています。それは、私と同じで前の学校で差別をされたことがあったんだと思います。前の学校では、外国にルーツを持つ人は私だけでした。今の学校では、いろんな国から来ている仲間がいます。そこで、「いろんな人がいるから相手の立場に立って物事を考えること」や「みんなが楽しく快適な学校生活を送れるように一人一人が頑張ること」など、たくさんのことを学びました。

みなさんにも私と同じ認識をもってほしいです。それは、「肌の色で人を判断するべきではない」ということです。肌の色だけではなく、髪の毛、目なども。見た目が違うから差別されるということは許されるべきではありません。この世の中にはたくさんの人種がいて、それぞれによって外見は違うのです。違っはいけない「ちがい」もあります。これは違っていい「ちがい」です。外国人であろうと、外国にルーツを持つ人であろうと、同じ人間なのです。従って、もちろん「映画の主人公は白人のイメージ」「肌が白い人だけが認められる社会」という認識も間違っています。肌のことをバカにされたりして、私は辛い目に遭いましたが、実は私自

身、肌が黒いことに関して、差別意識を持つていたことにも気づくことができました。「肌が黒いことは悪いこと、恥ずかしいこと」という認識が私の心の中にあつたのです。その悪い認識が私を苦しめていました。

映画「リトルマーメイド」についてインターネットで調べているとこんな記事を見つけました。「黒人のアリエルが誕生することの意味」気になり見てみるとそこにはこんな映像がありました。『アリエルの予告編を黒人の幼い女の子が見ています。アリエルの顔がアップになったその瞬間、驚き満面の笑みで「私みたい」とつぶやいたのです。』

まだ、肌が黒いことを気にしている自分がいます。まだ、肌が白い人のことをうらやましいと思う自分もいます。まずは、「自分のことを好きになること」から始めます。そして、自分の肌のことをもっと好きになれるようにしていきたいです。



## 個性じゃなく魅力

明和町立明和中学校 二年

石 田 翔 埜

五歳年下の僕の弟は、自閉症スペクトラム障害という障害を持っています。

僕が六歳の時に弟の障害がわかりました。そのときの母は、まだ小さかった僕にもわかるように、何度も何度も障害のことを説明してくれました。

弟の障害がわかるまで、僕は障害とは無縁の生活を送ってきました。

障害がわかる前から、母には「困っている人がいたら助けるように。」と言われていたので、それなりに自分の中では人助けしてきたつもりでした。でも、弟の障害がわかってから、生活が少し変わりました。

障害がわかっても、母は僕や家族の前では変わらず笑顔でしたが、僕たちが寝てから一人で悩んで泣いていたり、障害のことを勉強したりしていました。

ある日、スーパーで弟を連れて買い物をしていた母に、知らないおばさんが「頭がおかしい子や。」と弟のことを罵倒していました。まだ三歳だった弟が、おばさんの背中を叩いたのが原因でした。叩いたことは悪いことですが、弟が通りたい所におばさんがいて、邪魔だったからおばさんの背中を叩いてしまったのです。叩かれたおばさんからしたら、急に叩かれて、頭がおかしい子だと思われても仕方なかったのかもしれない。

その当時の弟は三歳でしたが、一切喋れませんでした。弟には、そこにいたおばさんはただの障害物としてしか認識できていなかったのです。どいてほしかったから、背中を叩いてしまったのです。

叩いてしまったことに謝罪している母が、これでもかというくらい罵倒されている姿を見て、僕は怒りと悲しみを覚えました。なぜ謝っている母が、そこまで言われたいいけないのか……。そのことを母に言うと、「あのおばさんも同じ状況になったら、わかるはずやから……。」と言っていました。

同じ状況にならないと、人はわからないのでしょうか。

明日、もしかしたら自分が事故をして、障害を持つかもしれない。生まれてくる子どもに障害があるかもしれない。そんな風に考えている人は少ないのでしょうか。そういう生活を送るかもしれない、と頭の片隅にでも一人一人持っていられればどうでしょう。そういう考えの人が

増えれば、世界は絶対に変わると思います。

この世の中には、必死になって生きている人がいるのに、おばさんのように、人の気持ちなど考えることもなく、否定する人がいます。僕は今でもあのおばさんのような人がいるのが信じられません。この世界で生きているのは、みんな同じ人間なのに。

たまに、人から弟は個性的だね、と言われるりもします。僕は個性的と言われるのは何か心のどこかで「個性的ってなんなのだろう。」って引っかかってしまいます。

個性的な人と言われるより、魅力的な人と言われる方が、人はいい気分になると思います。だから、僕は弟の障害を個性とは思いたくなくて、それは弟個人の魅力だと思っています。

病気だから、とか障害があるとかは、目がぼちちりしているとか、背が高いとか、一人一人が何かしら持っている魅力と一緒に思います。

今では喋れるようになった弟は、小学三年生で、世界の国や国旗、都道府県の県庁所在地、特産品を完璧に覚えています。好きなことに没頭して、本など色々なものを見て、すべて覚えていきます。本当にすごい事だと思えるし、そういうところも弟の魅力だと思います。僕の誇りです。

障害を魅力と考えられる世の中にしていきたい。しなくてはいけないと思います。

障害を持っている人にだって人権はあります。みんな同じ人間なのです。世界みんなが、幸

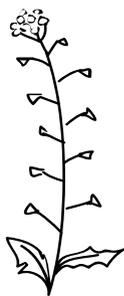
せに生きる権利を持っています。

障害を持っている本人、家族、関わる全ての人、それ以外の人も笑顔で過ごせる世界にしたい。

母のように、悩み泣いたりする家族が減る世界にしたい。

みんなが生きていてよかったと思える世界にしたい。

弟の障害がわかる前の僕の人助けは小さなものだったのだ、と今は思います。だけど、僕一人ができることは小さい事かもしれないけど、今以上にできることを積み重ねていきたいです。全ての人がそう思い行動にうつしてくれれば僕は信じています。



## 身近になった障害

鈴鹿市立鈴峰中学校 二年

伊藤心優

朝起きたら、音が聴こえなくなっていた。完全に聴こえないわけではない。何か話しているのは分かるが、何を話しているのか分からない。これが、初めて難聴を経験した去年の冬のことである。

メニエール病の初期症状だと診断された。メニエール病は、めまい・吐き気・難聴などを伴う耳の病気である。私は、左耳が重度の、右耳は軽度の難聴があった。コミュニケーションをとるのは非常に困難だった。右耳の僅かな聴力と、相手の唇の動きだけで何を話しているのか判断せねばならない。そしてこの時期は、みんなマスクをしていた。

そんな状態ながらも、登校した。先生から耳のことは説明してもらった。だが、みんなが何を話しているのか分からないことに孤独感を感じた。何か聞かれても聞きとれないので、何度

も聞き返すのだが、それでも聞きとれないので、「もういいよ」と苦笑して去られるのが寂しかった。だから私は、一度ですべて聞きとろうと努力したし、聞こえていなくてもとりあえず相づちを打った。みんなが笑っていれば笑った。一人、仲間はずれになることが何より怖かったのだ。みんなと同じになろうと焦っていた。

私も、聴覚障害、平衡機能障害を経験している者として、差し出がましいかもしれないが、障害について思うことを書きたい。

私は、障害の差別をなくすことは不可能だと思う。最近、障害者の差別をなくそうと、「障害者も健常者と同じように扱う」という考えが広がっているが、どこか見当違いに思えるものもある。健常者と全く同じ対応では生活できない。例えば、英語のテストがあつたとする。リーディング、リスニング、ライティングでそれぞれ一〇〇点ずつ、合計三〇〇点満点で、合格基準が二〇四点だ。ろう者のAさんは、リーディングとライティングで満点をとったが、リスニングができないので〇点、合計二〇〇点で、合格できなかった。これは、Aさんの努力を無視することになる。この場合、Aさんのリスニングテストは免除し、二〇〇点満点、合格基準一三六点にすべきだろう。

平等ではなく公平という考え方だ。平等は、みんなに同じだけ与えること。公平は、その人に合っただけ与えること。Aさんにみんなと同じ二〇四点基準のテストを受けさせるのが平等

で、Aさんには一三六点基準のテストを受けさせるのが公平だ。障害者に必要なのは、公平な支援ではないだろうか。

でも、よく、障害者を「助けてあげる」という表現をする人がいる。私はこの表現があまり好きではない。無意識のうちに障害者を見下しているように感じると、いかにも善いことをしたというような、誇らしげなふうにも聞こえるからだ。だが、障害者と健常者はそれほどまでに違うものだろうか。確かに、障害者には、健常者よりもできないことが多い。それは決定的だ。だが、人としては、何の違いもない「人間」だ。障害があるということで、同情されたり、特別扱いされたら、あまりいい気分ではないと思う。だから、みんなと同じように、「対等に」接してほしい。障害者も社会の一員として普通に参加する世の中になってほしいと願う。

できることは違う。健常者と比べると明らかな違いがある。健常者と全く同じ扱いではなく、できないことに対する支援が必要だ。しかし、人としては、障害者も同じ人間である。そこは、普通に接してほしい。障害があるという「能力」と、「個人」を切り離して考えれば、障害者も気持ちよく暮らせる社会になるのではないか。

そういえば最近、嬉しいことがあった。仲のいい友達のグループで、カラオケに行く約束をしていたが、私は難聴が再発してしまった。メニエール病は、耳が聞こえにくいのに、子供の叫び声や食器の音などがかえって強く響き、不快に感じることもある。カラオケのような大き

な音のする場所は、大変なストレスがかかる。友達に、

「行けやんくなっちゃったから、みんなで行ってきて」

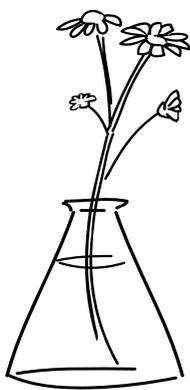
と言うと、友達は当然のような顔をして、

「ああ、やから、カラオケやめて、私の家で遊ぼうと思っとんの」

私は驚いた。気遣いに嬉しく思いながらも、私のせいでみんなが、行きたかったカラオケを我慢しているのではないかと申し訳なく思った。すると、

「みんなで行けやんのならカラオケとかどうでもいいから」

配慮しながら、輪に入れてくれた。私が望む対応だった。



## 祖母の手となり足となり

伊勢市立城田中学校 一年

中 崎 恭 誠

皆さんは手足に麻痺があるとどんな感覚だと思いますか。僕の祖母は、十五年前に脳出血という病気で倒れました。地域の人や家族による発見と連携で一命を取り止めたと母から聞きました。そして、祖母は厳しいリハビリを頑張り、なんとか一人で歩くことができるようになりました。しかし、左手足には麻痺が残ったままです。

「おばあちゃんの麻痺はどんな感じ？」

と、僕は祖母に聞きました。すると、祖母は

「常に手足がしびれている感じで、手で物をつかんでも落とすとしてしまうし、足が上がっていきなくて転んでしまうこともある。自分の思うように体を動かすことができない。」

と、教えてくれました。僕はその時、正座をした後に足がしびれる感覚を思い出し、これが

ずっと続くのは本当に辛いだろうと思いました。

祖母は、家の中では杖がなくても壁や柱をつかみながら一人で歩けます。しかし、外出する時は杖について誰かに支えてもらうか、車椅子を誰かに押してもらわないといけません。普通に歩いて、普通に出掛けられることが当たり前ではないのだと僕は祖母から学びました。そんな祖母が辛い気持ちにならないように、祖母と出掛ける時は率先して車椅子を押すこと、腕を支えて歩くことを決意しました。

僕が小学生の頃のことです。祖母と母と僕の三人で買い物へ出掛けました。駐車場が混んでいたため、母は祖母と僕を先に降ろして、

「中のベンチで待っててね。」

と言い、駐車スペースを探しに車へ戻って行きました。僕が祖母に、

「車椅子、持って来る。」

と言うと、祖母は

「運動になるから歩くわ。」

と言いました。僕は近くにあったショッピングカートを祖母に渡し、中のベンチまで一緒に歩いて行こうとすると、

「あつ。」(ドタン！)

祖母は少しの段差で転んでしまいました。僕は、ショッピングカートがあるからと、杖で歩く時より油断して、祖母の体をしっかり支えていなかったのです。そうか、祖母の手には麻痺があるから、ショッピングカートをしっかりにぎれていなかったんだ。

「おばあちゃん大丈夫？ごめん、ちゃんと支えていなくて……。」

と言いながら焦る僕に、近くを通りかかった女性が優しく声を掛けてくれました。そして、一緒に祖母を起こしてくれました。

「ありがとうございます。」

祖母と僕の声が重なって響き、そこには温もりが感じられました。女性の優しさに触れ、僕は思いました。これから遭遇する色々な場面で適切な状況判断ができる人になりたい。困っている人を見掛けたら、勇気を出して声を掛け、手を差し出せる人になりたい。

そこへ母が来て、僕は状況を全て話しました。母はお礼を言おうとその女性を探しましたが、もう見当たりませんでした。母は、

「優しい人が近くに来てくれて良かった。」

そう言いながら、車椅子を持って来てくれました。僕は祖母の車椅子を押しました。車椅子をよけて歩いてくれる人とすれ違うたび、

「すみません。すみません。」

と、頭を下げる祖母が印象的でした。人が歩くために作られた通路は、車椅子が通るには少し狭く、不便を感じたり、車椅子に座ったままでは商品に手が届かなかったり、祖母のように体に不自由があると、ちょっととした買物も簡単ではないのだと気付くことができました。

僕は、そんな祖母との関わりを通じて、普段気付くことができない大切なことを沢山学ぶことができました。病気になって、不自由な体になってしまったことは変えられないかもしれないけれど、自分や周りの人の言動で、祖母の行動範囲や気持ちは変えることができます。と思います。

「おばあちゃん、僕がおばあちゃんの手にもなるし、足にもなるよ。だから困った時は何でも言ってみて。」

と、僕が祖母に言うのと、祖母はニッコリして

「ありがとう。長生きして良かったわ。」

と、優しい笑顔を見せてくれました。

高齢者の方々が安心して、安全に暮らせる環境作りができるよう、僕もじっくり考えて過ごしていきたいと思っています。

自分だけの目線で物事を考えるのではなくて、色々な立場の人がいることをいつも頭におき、相手目線で考えられるようにしたいと思います。そして、全ての人が平等に生活が送れる社会が、もっと広がっていくと良いと思います。

○三重県大会 優秀賞（三重テレビ放送賞）

## 受け継ぐ世代として

伊賀市立崇広中学校 三年

藤 崎 香 帆

「私たちが被爆者や戦争体験者の話を直接聞ける最後の世代なので、戦争記憶や経験者の思いを伝える役割を担いたい。」

終戦記念日の八月十五日、何気なくつけていたテレビから聞こえてきた高校生の声にハッとさせられました。毎年夏休みになると終戦記念日や原爆の日についてのニュースが流れますが、私は歴史上の事実として受け止めており、はるか昔の出来事のような気がしていました。同じニュースの中で戦後生まれの割合は日本の総人口の八十六パーセントに上り、戦争を伝えることの必要性を訴えていました。私はまだ戦前生まれの人が存在するという事実には驚きながら頭に浮かんだのは、祖父母の家の仏壇のそばに飾られている曾祖父の弟の写真でした。あんなに若い人達が戦争でたくさん亡くなったという事実と、同時期に生きていた人がまだ生きて戦争

を語りついでくれている事実とを考え、私は改めて戦争の怖さを感じ、身近なものであるという事に気付きました。私の曾祖父も戦争へ行っていたことや、祖父の姉も戦争で亡くしたことを知りました。

別の日に見たニュースで、戦争を経験した人が、

「小さい頃は一等兵になりたかった。お国のために戦って死にたかった。きっと、昔の人達的那种な気持ちには今の若い人達にはわからないだろう。小さな頃からお国のためだと教育され、戦い方を教えられ、戦場で命を落とすことは誇らしいと感じていた。」

と語っておられました。それを聞いて私は「この人は何を言っているのだろう。」「死ぬことが誇らしいなんて考えられない。」と思いました。今では考えられない思想だと思います。私は間違った教育を受けることの恐ろしさを痛感しました。自分のやりたかったこと、なりたかったものを叶えられずに国のために戦争へ行つて死んでしまう。そんなにひどいことが曾祖父の時代の日本であつたなんて私は信じられませんでした。

二〇二二年二月二十四日、ロシアがウクライナへの本格的な軍事侵攻を開始してから約一年半経ちました。戦争が始まったと聞いた最初の頃はニュースで取り上げられることも多く、ロシアが世界各国から制裁を受け、すぐに終わるのではないかと私は楽観的に見てしまっていました。そうするうちに、ウクライナではたくさん的一般市民の死者がでているというニュース

が流れはじめ、ウクライナのロシアによる侵攻地域の色分け地図などを毎日目にするようになり、「いつ終わるのだろう。」と私は少しずつ不安を感じるようになりました。しかし、今もこの戦争のニュースは毎日のように聞かなくなっています。なぜでしょうか。今もなおたくさんの方が命を落としているはずですが。空襲などにより住む場所をなくし、別の国で過ごしている難民の人たちもまだ多くいます。この事実もまた、私に戦争について考えるきっかけをくれました。

この作文を書く前まで私は、戦争に対して怖い印象しかなく、戦争の本を読んでも気分が落ちこむので、戦争についてはあまり深く考えたくありませんでした。しかし、戦争はいつどこで起こるかわからないものであること、日本でも、ある日突然戦争が始まる可能性があること。色々考えているうちに、私の中に一つの考えが浮かびました。

「戦争は最大の人権侵害なのではないか。」

戦争の始まりは相手の立場も気持ちも何も考えずに始まります。そして、戦争は失うものばかりです。戦争には直接関係のない一般市民の人たちまで無差別に殺され、人々の生活にも影響を与えます。私がどこか遠い昔に起きていたように感じてしまっていた戦争は、今始まったもおかしくないものだったのです。

私は人権について考えるたび、相手の立場に立てる人、相手の立場や気持ち尊重できる人

になりたいと考えてきました。一人一人が相手の立場や気持ちに寄り添うことができたなら、戦争など起こるはずがないと思います。戦争時の間違った教育ではなく正しい知識を持ったうえで、一人一人が人権を尊重する気持ちを持つことができたなら、戦争のないとても平和な世界になるのではないのでしょうか。

今の日本は平和です。毎日の危険を感じることはなく、おいしいごはんを食べることができ、幸せを感じながら生活することができます。しかし、今も世界のどこかで戦争が起こっています。日本で戦争を経験した人達が、次の世代に戦争の恐ろしさや平和であることの大切さを語り継いでくれている今、その話を直接聞くことができる最後の世代として、私はこれから積極的に戦争の事実を知識として増やし、その思いを引き継いで伝えていける人になりたいと思います。「平和」であることが人権尊重につながると私は信じています。



○三重県大会 優秀賞（三重テレビ放送賞）

## 新しい視点と変わる自分

玉城町立玉城中学校 三年

西川 論

「何ができないのかではなく何ができるのか」私は二年程前からずっとこの視点でものを見ている。きっかけは弟にあると思う。弟は特別支援学級で学んでいる。昔弟はしょっちゅう痙攣を起こしており、あるときひどい痙攣を起こした際に呼吸が止まってしまい、長時間脳に酸素がいなくなってしまうた。そのため脳が大きなダメージを受け、色々なことに影響が出てしまったのだ。私はそんな弟に強く当たってしまっていた。いつでもどこでもだらしなく、ふざけた発言や行動をする弟が気に食わなかった。ミスをすれば「何でこんなこともできないんだ。」と叱ったり、「バカ」と罵ったりと目の敵にしていた。

しかし、そんなあるとき弟にゲームを貸してほしいと言われた際に、「最近勉強していないから」という理由で弟の苦手な文章問題の冊子を渡し、

「それできたら良いよ。」

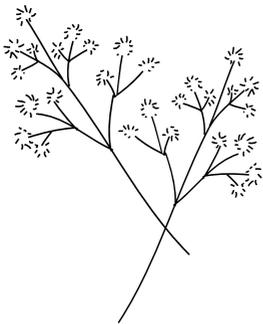
と言い残し、部屋を出た。そしてその後、ものの五分程度で問題を解いていた。私はそのとき、「えっ、もうやったの？速っ！」

と思わず口に出していた。また、それと同時に、「もうこんなに速くできるようになったんやな。」と深く感心していた。私はその出来事があったから弟を観察していた。すると、大きな発見があった。以前は全然できなかった部屋の片付けや次の日の時間割確認、学校からもらったプリントを出すなど、小さなことが色々とできるようになっていた。また、弟は学校でも意外と万人受けが良かった。この「いつでもどこでもふざける、天真爛漫」な性格を良く思わない人も中にはいるが、それ以上に、同級生からは「話しやすく親しみやすい」、上級生からは「可愛い」、先生からは「面白くてノリがいい」と色々な人から好かれ、今や先生のスクワットの重りとしておんぶされる程だ。そして、そうしている内に私の頭をある考えがよぎった。それは、「プラスの面が、ちょっとしたマイナスの面にずっと隠されていた」というものだ。弟の「話しやすい」、「親しみやすい」、「面白い」などの良いところが、「すぐふざける」、「勉強がでない」、「空気が読めない」などの良くないところに隠され、結果表面には悪いイメージが出てしまっていたのだ。そして私は弟を見る視点を変えてみた。「何ができないのかではなく、何ができるのか。」という視点で見ると、今までとは全く違って見えた。例えば、算数の文章問題

だと、今までは意味の分からない答えになってしまい、私が叱っていたが、この視点で見ると、どこからができていないのか、どこまではできているのかがよく分かり、ここがこう違っていると分かりやすく教えることができた。また、この視点で見ると、私にも過ちがあることが気がついていた。弟のできることを理解もせず、弟のできないことをさせ、できなかったらできなかったで、叱って自分を正当化していたのだ。これが分かったとき、私は弟に申し訳なく思うのと同時に、この視点でものを見ることは大切なのだと思う。そしてこのことを忘れないようにしていきたいと強く思った。

障がい者に対するいじめや差別は今もなお起きている。ある大手自動車メーカーに障がい者枠で入社したある男性が上司や同僚から差別発言やパワハラ、いじめを受け続けていたということが発覚した。被害者であるその男性によると、「作業遅れやミスをしているのは自分だけではないのに対し、上司は自分だけを目の敵にし、ことさら酷く叱り、怒鳴り、背中を殴ることも頻繁だった。」とのことだ。またあるときは、同じ場所で作業をしていた社員にいきなり肩に体当たりするように強くぶつかられ、突き飛ばされた。そして、そのことを上司に伝えると、「わざとじゃない。お前が偶然ぶつかって転んだだけだ、肩を痛めたのは倒れた拍子に手をついたからだろ！」と強く言われ、結果全治十日間の右肩挫傷と診断されたという。私はこのことと今の自分の視点と少し関係があるのではないかと思う。この視点でものを見ない人は、体の

不自由な人に無茶なことをさせ、できなかつたらできなかつたで「障がいがあるからできない」という勝手な解釈をし、理解しようとしないう人が多いからである。これは何も障がいのことだけではない。職場や学校でも同じである。その人の限界などを理解もしようとせず、物事を押しついたり、無理難題なことを言ったりし、どちらか一方が自分の理想に相手を合わせようとするこゝによつて、仲違いになり、やがて差別やいじめに進展するのだ。それを防ぐために今一度自分の視点を振り返ってみてはどうだろうか。きっと物事が新しく見えると思う。



## ぼくの指

鈴鹿市立創徳中学校 一年

辻 尊 樹

人はみんな違うところが絶対ある。顔つき、性格、目の大きさなど考えるとたくさんある。そこでぼくは、みんなと大きく違うところがある。それは手足の指だ。ぼくは、右手の中指がなく四本だ。足は両足とも親指と人差し指、中指と薬指がくっついており、みんなと形がちがう。それを理由にぼくは手足のことでバカにされたり、苦労した経験がたくさんある。

ぼくは、小学一年生のとき家族で学校に自分の指のことを話しに行った。ぼくはまだうまく説明できなかったのです、お父さんが説明してくれた。そして一年生になり、初めての学年集会があった。そこで先生がぼくのことをみんなに伝えてくれた。ぼくは正直それがとてもいやだった。その時は先生に「うん。」と言ってしまった。ぼくがその時いやだった理由は、みんながぼくの指のことを知ってしまい、逆にとでもこわかったからだ。そして学年集会后、ぼくにみ

んなが寄ってきた。みんながぼくに「手を見せて」と何回も言われた。ぼくはこわい気持ちの中、手を見せた。するとみんなは「なんで？」とか、「どうしてそうなったの？」とたくさん聞いてきた。ぼくはうまく説明することが出来ず、先生に説明してもらった。ぼくはその頃からこのような経験があるときは、「生まれつきだよ。」と答えるようにした。これはお父さんに教えてもらった。

そして夏になるとお父さんはぼくのことをたくさん心配していた。それは、少しぼくも不安だったプールの授業だ。プールの授業では普段見えない足が見える。足の指もみんなと違ってくる部分がある。それが少し心配だった。でもプールの授業のときは、隣の子が足を見てくるくらいでプールの授業の後、とても安心した。

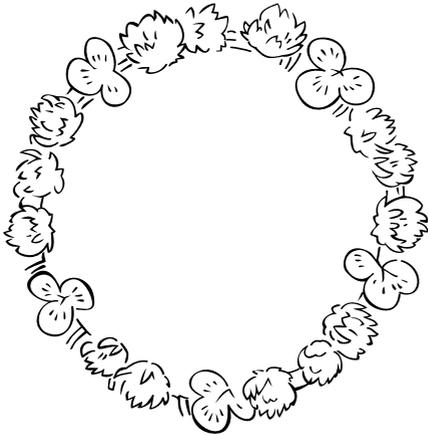
小学三年生くらいまでは、自分のことや不安が多かった。でもぼくは、中指がたった1本ないだけで、生活に支障は特になかった。周りから見たら「すごい。」と思うかもしれないけれど、ぼくからしたら普通だ。でもぼくがわからなかったのは自分自身のことではなく、友達や年上の子にバカにされたときだった。

五年生になると学年でぼくの指のことを知らない人はいなくなった。初めて同じクラスになった子でもぼくの名前を知っていた。でも、学校全体がぼくのことを知っているわけではなく、一つ上の子にバカにされたことがあった。帰り道一つ上の子と喧嘩をしまい、ぼくも結構言っ

てしまった。でも、年上の子は、ぼくの指を見て、「キモッ。」「宇宙人は黙れ。」などたくさん言ってきた。ぼくは、その時とても悔しかった。今までで一番悔しかった。ぼくは、「生まれつきなんや。バカにすんな。」と言い返した。その時、ぼくのことを助けてくれたのは友達だった。とてもうれしかった。ぼくは帰ってから相談し、次の日学校でそのことを友達と先生に話し、ぼくのことをバカにした二人の子は、先生にとっても怒られた。その先生は、先生が泣くほど真剣に怒っていた。ぼくはそのとき、いろんな人に守られているんだなと感じた。

そして中学一年生になった。小学校の頃にたくさん出来た友達のおかげで、指のことでの不安は全くなかった。中学校の友達にぼくの指のことを伝えると、とてもびっくりした表情でぼくの指を見つめた。

ぼくは、今までの経験で学んだことがあります。それは、困っている人がいたら助けることはとても大切だということだ。ぼくは、今までいろいろな人に助けられ、支えられ、ぼくにはどんなときでも安心できる味方がいる。そんな人にぼくはなりたい。もし、友達や、ぼくの方困っていたなら、助けてあげられる人になりたいと強く思う。



○三重県大会 優秀賞（伊勢新聞社賞）

いつも傍にいてくれてありがとう

津市立東橋内中学校 一年

ボロ ミユカ

私には、八歳年下の弟がいます。

弟は生まれつき重い病気を持っています。その病気はとても深刻で、入退院を繰り返していました。しかし、私が小学三年生の時に、約一年半続いた入院生活が終了しました。入院している間は、病気の症状から外へ出ることが許されず、暗く狭い部屋の中でずっと過ごさねばなりません。物心つく前から入院していたので、外に出ることができた弟は、とても嬉しそうでした。もちろん私も弟と一緒に生活ができることがとてもうれしく感じていました。

残念ながら、退院はしましたが、病気が治ったというわけではありません。入院すらしていないものの、通院して治療を続けなければならない状況には変わりなく、家では弟の看病をしなければなりません。集中治療室に居たときは、看護師さんが身の回りの世話をしてくれたの

で、私たちは動かなくてよかったです、いざ弟と一緒に暮らすことになる、やらなければならぬことがたくさんあり、母を見ているも何をすればよいかわからず、すぐに行動に移すことができませんでした。

弟は骨や筋肉が丈夫ではないため体を思うとおりに動かすことができません。また、声も出ないので、上手くコミュニケーションが取れません。強くサポートしなければならぬのに、意思疎通ができない弟を疎ましく感じることはありません。家に弟がいることが日常の風景になり、弟の看病をするのが面倒だと感じるようになりました。私が五年生になると、弟が嫌いになり、彼がその姿でいることを可哀想だと思えるようになりました。それから、弟と遊ぶことが少なくなり、私は友達と遊ぶことが多くなりました。

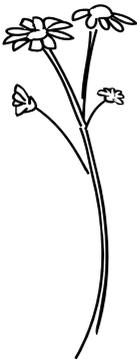
そんな五年生の夏休みのある日のこと、弟の面倒を見ながら、ひたすらゲームをしていました。ゲームをやり始めて三十分後に弟の様子を見ると、顔が真っ青になっていて、嘔吐していました。これはまずいと思い、お母さん呼びました。お母さん呼んだ時にはもう、弟は息をしませんでした。お母さんは何度も弟の名前を呼んでも応答なし……。お母さんが急いで心臓マッサージをしました。お母さんはものすごく泣きながら、私に救急車を呼ぶようにと言いました。私は、何をしたらいいのか、頭が空っぽになり、気づいたら病院にいました。初めて家族が死ぬんだなって実感しました。幸運なことに、その後弟は無事手術に成功して、元

気に毎日を過ごしています。手術の後、医者には、「これからも一生声も出ないし、体を動かすことも自分ではできないし、余命は二歳まで。」と言われました。しかし、弟は声も少しは出せるようになったし、体も自分で少しは動かせるようになるまで回復しています。余命についても、二歳はとうに越え、あと少しで五歳になろうとしています。いろんな人の祈りが通じたのかもしれない。神様に感謝でしかありません。

いえ、祈りや神様のおかげではないのかもしれませんが、それは、弟と暮らすようになってからわかったことです。弟が今日こうしていられるのは、彼自身の努力の成果です。おおよその医師の診断すら弟は覆したのです。そして、「できないこと」や「できるようにはならないこと」も努力で克服しています。その証拠として、退院したばかりでは、自律呼吸が難しいので呼吸器を着けていたのですが、現在は自分で呼吸できるようになりました。「生と死の瀬戸際にあっても、絶望を感じたりせず、努力して困難を乗り越えようと頑張っている私の弟はすごい！」と思えるようになりました。弟は何もできないように見えます。しかし、その「できない」という殻を身にまといながらも、その殻の中で、人の何倍ものスピードで成長を続けていました。私は弟を尊敬しています。弟は本当にすごいということをみんなに知ってもらいたいです。これからも、何事もなく元気に生きてほしいです。

みなさんは身近な人を大切にしていますか。いつも一緒に生活している人は近くに居すぎて、

その存在のありがたみに気づかないかもしれません。しかし、その人はいつもあなたの傍にいてくれます。いつもは口喧嘩をする仲であったとしても、いつもあなたを近くからサポートしてくれています。そして、何か大きなことが起こったらきつと手を差し伸べてくれます。近くにいてくれる人に対して、感謝の言葉を贈りたいですね。あなたのためにしてくれたこと、あなたのためにかけてくれた言葉、感謝の気持ちだけではなく言葉を贈りました。その人はいつかなくなるかもしれない。普段から傍にいて支えてもらっているお礼の気持ちを「ありがとうございます」の言葉を添えて贈りましょう。私も自慢の弟を彼が快適と思えるようサポートしていきます。そして、弟にも言います。「いつも傍にいてくれてありがとうございます。」



《奨励賞》（八編・順不同）

題名	学校名	学年	氏名
決めつけは良くないと思う	非公表	非公表	非公表
障害者の姉として今、思うこと	川越町立川越中学校	二年	山下芽生
虹の世界へ	度会町立度会中学校	二年	井上千愛
自分の気持ちに向き合うこととは	熊野市立木本中学校	二年	喜田心美
画面の先にも人はいる	伊賀市立城東中学校	二年	松浦ひかり
ジェンダー平等を実現するには	四日市市立常磐中学校	一年	後藤亜梨
命を守るために	御浜町立尾呂志学園中学校	一年	中谷ひまり
平等と公平	津市立西橋内中学校	三年	齋藤悠乃

第42回全国中学生人権作文コンテスト

# 三重県大会表彰式







人権イメージキャラクター  
人KENまもる君

# 悩みがあったら 相談してね!



人権イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん

秘密は守るよ! 法務局で相談を  
受け付けています!



電話で相談

通話無料

こどもの人権 110番

フリーダイヤル ぜろ ぜろ なな の ひやくとおばん

# 0120-007-110



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君

相談時間

月曜日～金曜日 午前8:30～午後5:15



いじめられている…



インターネット上の  
トラブルに  
巻き込まれた…

学校や家、宗教、  
その他のことで  
悩みがある…



LINE

LINEで相談

LINEじんけん相談



@snsjinkensoudan

▶ 友だち追加して相談してね!



SOSミニレターでも相談できるよ!

新しいミニレターは、毎年1回、小中学生の皆さんに渡しているよ!! すでにほしい人は、  
0120-007-110 に電話してね!!

インターネットでも相談を受け付けているよ!

<https://www.jinken.go.jp/kodomo>

インターネット人権相談

検索

クリック!

こちらからも  
アクセス  
できるよ!▶



法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

デジタル連携  
2020年度 国政情報  
公開

## 人権啓発キャッチコピー ～「誰か」のことじゃない。～

法務局と人権擁護委員は国民の皆さん一人一人の人権意識を高め、人権への理解を深められるように様々な人権啓発活動を行っています。

こどもの  
人権教室



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君

人KENあゆみちゃん

人権の花  
運動

大人の  
人権教室

全国中学生人権  
作文コンテスト

公式SNSに  
よる情報発信

人権啓発  
動画の公開

人権啓発冊子  
の作成・配布



法務省HP



YouTube



X(旧Twitter)



Facebook



LINE

## 人権相談キャッチコピー ～なんでもおしえて ころろのもやもや～

法務局と人権擁護委員は、人権侵害による被害を受けた方を救済する活動を行っています。

人権教室の申込みや人権相談に関するお問合せはお近くの法務局までご連絡ください。

津地方法務局人権擁護課  
津地方法務局四日市支局  
津地方法務局伊勢支局  
津地方法務局松阪支局  
津地方法務局桑名支局  
津地方法務局伊賀支局  
津地方法務局熊野支局

連絡先はこちら  
津地方法務局ホームページ



◆無断転載を禁じます◆

本作文集の作品を地方自治体が広報誌に掲載したり、学校が教材等に使用される場合には、あらかじめ下記に御連絡ください。

**津地方法務局人権擁護課 TEL 059 - 228 - 4193**  
〒514-8503 津市丸之内26番8号（津合同庁舎）



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君



人権イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん

